

板沢武雄教授学位論文審査要旨

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

1955-06

板沢武雄教授學位論文審査要旨

昭和二十九年十二月廿日、法政大学より文学博士の学位記が授与せられた。審査委員よりの審査報告書は次の如し。

板沢武雄提出學位請求論文は主論文一冊、副論文一冊より成る。主論文は「日蘭文化交渉史の研究」と題し、副論文は「阿蘭陀風説書の研究」と題す。

主論文「日蘭文化交渉史の研究」は、日蘭両国間に於ける一般文化交渉の跡を背景とし、主として所謂蘭学の起源とその発達とを攷究發説せるものにして、更に之を四部に分つ。

第一部は「総説」と題し、先づ「和蘭人の東方発展」の項に於いては、蘭学興起の前提として我が国と和蘭との接触交渉の發展とを述べ、第二部に於いては「史料解説」と題して、これらの史実に關する史料を詳論し、第三部「基礎的研究」に於いては、総説の典拠となるべき重要な個個の事象に就いて、八篇の論文を以て精細綿密なる考証を試み、第四部「余論」に於いては、十二篇の小論考を通じて、側面より前三部の論旨を立証し、更に之を鞏固ならしむるの資となせり。

本論文に於いて著者が最も力を致せるは第二、第三の両部に於いて、第二部の「和蘭国立文書館に存する日蘭通交史料、特に蘭館日誌に就いて」は日蘭交渉史研究の基本的史料にして著者が往年和蘭留学中親しくその原本を検討せる諸記録、特に長崎出島蘭館日誌に対して、詳密なる解説を施し、且つその真価を紹介したるもの、之に關する限り、内外の学界に未だ之に超ゆるものあるを

見ず。

「日蘭貿易の理解に役立つ種本の紹介」は「阿蘭陀名目語」と「花蛮交市拾聞」記との解題にして、共に著者が始めて発見して世に周知せしめしもの、爾後学界を益せること多大なるものあり「出島版のアルマナックについて」はこれ亦著者の発見すること多大なるものあり「出島版のアルマナックについて」はこれ亦著者の発見せるこの書の史料としての価値を述べたるものにして、所謂出島版に未知の一種を加へ得たること自体、既に斯学に対する一貢獻として、前二項の所述と相俟ちて、著者の史料採訪に対する熱意を窺ふに余りあるものとす。第三部の所論「日蘭文化交渉に於ける人的要素」、「阿蘭陀通詞の研究」、「辞書及び文法書の編纂と蘭学の発達」は、実に本論文の核心ともいふべき力作にして、一面蘭学發達の母胎とも見るべき出島蘭館長の江戸参府を利用して、江戸に於いて行はれたる日蘭文化交渉の事実と、長崎に於いて阿蘭陀通詞及び之を介して行はれたる日蘭文化交渉の實際とを特に力を傾けて攻究し、広く内外の史料を渉獵して前人未到の境域を開拓し、只管新事実の發揮に努むると共に、他面蘭学進歩の一基礎たる和蘭語学の發達を詳論し、これが進運を促せる辞書及び文典編纂の沿革を述べ、或は「蘭学事始」の記事の誤謬を指摘し、或は「江戸ハルマ」長崎ハルマ」編纂の経緯を明かにする等、著者の論究を俟ちて、始めて真相の解明せられたる事実極めて多く、いづれも創見に富みて先賢の誤を正せること尠少に非ず。なほこの部に於いて論じたる「地動説の展開とその反動」とに就いては、長崎通詞に依りて提唱せられたる新学説の全貌を

明かすると共に、之に対する反撃たる釈円通の梵曆採用運動の顛末を著者が多年蒐集せる史料に基きて詳細する所あり、我が国近世思想史の研究上注目すべき業績たるを失はず。「厚生新編訳述考」以下三編の考説は、徳川幕府が政府事業としてその天文台に下命せるシヨメル原著「家尊百科辞典」翻訳の由来と経過とを詳述し、この事業がその量に於いて、また質に於いて、維新以前に於ける洋書訳述の企画中第一位に位すべきを論証したるものにして、この事実を明らかにせるは亦専ら著者の勞に依る。「蘭学の意義と蘭学創始に関する二三の問題」は著者の述作としては稍初期に属する研究にして、爾後著者自ら改訂を加へたる所あるも、「奎学」「蘭学」「洋学」の称呼がその実質に於いて殆ど異る所なきに拘らず、それぞれ独特の歴史的色合ひ（ニュアンス）を有する趣を闡明し、称呼の差は自ら時代により西洋学に対する時人の感覚の差を反映する所なきに非る旨を述べたる点は、附説する所の禁書問題に関する新史料の紹介と、之に対する著者の見解と共に、今日なほ有力なる一寄与たるを失はず。第四部「余論」に収めたる「欧洲に於ける日本学建設者としてのシーボルト」以下合計十二篇の論考は概ね各独立せる短篇を単に彙録合載せるやの観なきに非ずと雖も、多く前人未知の事実を紹介し、或は先賢の深く注意せざりし事項を解明せる所頗る多く、第一部乃至第三部の論旨を間接に与へ、之と自ら相表裏するものと解すべく、亦以て著者の視野の広きと些事をも忽せにせざるその学風の篤実とを徴するに足る。

顧るに、日蘭両国文化交流の歴史は、明治年間稍その研究に手

を染むるものあり、大正、昭和に及んでその蹤を追ふもの輩出して、この分野の開拓せられたること少しとせず。然れども之を通観するに、その基く所の史料は専ら之を国内にのみ仰ぐものあり。主として之を海外にのみ求むるものあり、何れも一長一短の憾なきを免れざるに方り、著者はよく内外の史料を併せ探り、刻苦して之を撮影謄写するに勞を吝まず、その間著者の努力に依り新に発見せられたるもの亦少からず、著者が之を精研し、之を綜合して、よく敍上の諸篇を著し、学界に多くの寄与を致せる功は特筆に値するものあり。ただ本論文は個個の論考の間に多少の脈絡連関を欠くやの概あり、体系的組織的な日蘭文化交流史とはいふべからざるに似たれども、蘭学の発達を中心とする両国文化交流史上の重要問題は、略、茲に鮮明し尽されたるかの觀あり。将来未拓の分野を開かんとするものも、本論文を基礎とせずして新に歩を進むるを得ざるべきは、何人も否む能はざる所なるべく本論文に現れたる著者の造詣の広く且つ深きと、論断の堅実穩健なるとは亦普く世の賛するに吝かならざる所なるべし。

副論文は「阿蘭陀風説書の研究」と題し、徳川幕府がその對外政策を定むる上に最も重要な資料とせる所謂「阿蘭陀風説書」を百万苦心して国の内外にこれが原文並に訳文を搜羅し、之に詳細なる注釈を施したるものにして、正保元年以降延享二年に至る間の風説書一百五十七通及び元祿四年の参考資料一通を収む。惜しむらくはその前後の分を欠くと雖も、幕末に近き頃のものには既に知られたるもの多く、必ずしも強ひて茲に収録考究の急を見ざれども、享保以前のものに至りては「通航一覽」所載のものを除

法政大学史学会々報

会 務 報 告

昭和二十八年十一月一日

史蹟調査「相模国分寺跡とその周辺」

藤井・板沢・丸山・河原各教授、芥川助手卒業生七名、在学生五名参加。

海老名町役場会議室にて昼食、文化財委員児島氏より一時間にわたり、相模国分寺跡とその周辺についての講話あり、順路により最後まで御指導を受く。午後四時半散会。

十一月十一日

法政大学史学会総会及例会 午後六時より於十四番教室

総 会

開会の辞 宮前委員

議長選出 議長佐藤委員 副議長堀切委員

会計報告 宮前委員

行事報告 佐藤委員

例 会

会長挨拶 板沢教授（藤井教授御欠席により）

講師紹介 板沢教授

講演「マルチン・ルターの宗教改革の源について」

東京大学教授 山中謙二先生

きては、殆ど世に知られざるもののみなるを以て、従来その研究あるを聞かず、また邦文と対照すべき蘭語原文の存するもの、却つて当時のものに多きに鑑み、本論文に於いて著者が専らこれらに力を注げるは寧ろ宜しきに叶ひたりといふべく、以て本論文の真価を軒輊するに足らず。その注解の如きは、日蘭交渉史に深く沈潜せる著者にして始めて之を善くすべく、主論文と共に遺憾なくその努力を発揮せるものといふべし。

敍上の理由に依り、本論文の提出者板沢武雄は文学博士の学位を享くる資格十分なりと認む。

昭和二十九年十月卅日

審査委員（日本大学教授）

同 石田 幹之助
（東京大学教授文学博士）

同 岩 生 成 一

同 （法政大学教授）

同 藤井 甚太郎